

---

# 蛇に憧れる男の異世界生活

H L

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蛇に憧れる男の異世界生活

### 【ZPDF】

Z0637M

### 【作者名】

H-L

### 【あらすじ】

ゲーム大好きな高校生篠崎 幽は完璧超人の幼馴染み原川 幸と  
加藤 柚姫といつもの日常を過ごしていた。ある日幼馴染み一人の  
よくありそうな異世界トリップに巻き込まれてしまつ。そしてつい  
た場所は剣と魔法の世界。

## こつもの俺達の日常（前書き）

ケータイからの投稿なのでパソコンの人は見づらいと思いますが見ていただけると嬉しいです。

## こつもの俺達の日常

力チャ力チャ、力チカチ。え？なにやつてるかつて？今俺はメタギアソリッドというゲームをやつてている、最近PSPにでた方だ、わからない人は是非調べてくれ。

いやはや、やはりスークはかつーいなー。本当憧れるなー。え？俺は誰かつて？

俺の名前は篠崎 幽しのざき あつ高校生だ。好きなものはゲームで主にアクション系のゲームをよくする。学校の成績は普通で容姿は普通だと思う、運動神経はいいほうだ。

「おー、やられてるぞ。」

「なんだつてー！」

急いでPSPの画面を見るとゲームオーバーになつていた。

「せつかくあそこまでゲージ減らしたのにー。」

「お前がボーッとしてるのが悪いんだろ。」

今俺の部屋の床で寝そべりながら話しているのは俺の幼馴染み兼親友兼同級生の原川 幸はらかわ こうだ。容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群、まさに完璧超人！…………はあーイケメン滅べばいい。

「ん？なんか今殺氣が。」

「気のせいじゃないか？」

ちつ！無駄に勘のいいやつめ。

ピンポーン

突然インター ホンがなつた。多分アイツだろ。

「ちょっと行ってくる、多分アイツだろ。」

「いっつてらっしゃーい。」

「ゴロゴロしながら「ウが答える。」 いつ人の家でよくもまあこんなにリラックス出来るな。まあいつもの事だからいいけど。 そう思いながら玄関に向かつ。

「はーい、今開けます。」

ガチャ

扉を開けるとポーテールの美少女もといもう一人の幼馴染みの加藤柚姫がいた。

「ユウ遊びに来たぞ！」

ユズは名前の通り女なのだが性格と言葉使いが男っぽいので同年代の男性から姉さんや姉貴と呼ばれ、女性からはお姉さまと呼ばれ多くの女性たちを間違つた道へ導いてきた。 いつも「ウと同じよう」に完璧超人だ。

「飯食つてユウとイチャイチャして帰るの間違いじゃ無いか？」

「イチャイチャなんかしていない！」

顔を真つ赤にして否定しているが一人は付き合つてゐる。本人達は否

定しているが周りの人達はコウとコズはお似合いカツプルだと書いていたし俺も付き合つてると信じている。

「俺は一人がいつか打ち明けてくれるのを待つてているよ。」

「だからー違うつて！」

「ハイハイ、分かつたから飯出来るまで上でコウとイチャイチャしてて。」

「絶対分かつてないだろ君！」

「何言つてるんだ？お兄さんはすべて分かつてるぞ。」

「もういいよ！ユウのバーク！わからず屋！鈍感！朴念人！』

わからず屋は分かるが鈍感と朴念人つて何のことだ？・そう言つてコズは二階に上がつて行つた。

「さあーてとさつさと飯作るか。」

なぜ俺が飯を作つてているのかといふと5年前親が交通事故で死んでしまつたからだ。何でもトラックの運転手の余所見運転で起きた衝突事故らしく運転手の人が葬式場に謝りに來た。泣きながら俺に謝り土下座までしようとしたのでさすがに止めた。俺は運転手の人を恨むことが出来なかつた。コウやコズにお人好しと言われたが否定出来なかつた、そしてコウとコズは俺を抱き締めながら一緒に泣いてくれた。葬式の後親戚の伯父さんが家に来ないかと言つてくれたのだが断つた。両親が残したこの家と幼馴染み二人と離れたくなかつたからだ。

おつとなんかしんみりしてしまつたな、まあそりゅう理由で俺は

人暮らしをしていて飯などは自分で作っている。コウやコズの両親は仕事が忙しくなかなか帰つて来ないので俺が面倒を見ている。よし出来た、今日は鳥の唐揚げだ。

「おーい、一人とも出来たぞ下りてこい。」

返事をして一人とも下りてきた。

「「じはん じはん 今日の「じはんはなーにかな?」」

コズがなにやら可愛い歌を歌つている。コズは男っぽいのだが女の子らしいところもよく見せる、そのギャップのせいかなともてる。

「今日は唐揚げだぞ。」

「やつたー唐揚げだーー。」

「コズひぬきーよ。」

喜ぶコズにコウが注意する、だいたいいつもこいんな感じだ。

「いただきます。」

「「いただきます。」」

二人が同時に唐揚げを食べる。

「美味しいー！」

「うまいな。」

「一人が美味しいと言つてくた、ゴズは半ば叫ぶように言つてコウはゴズみたいに叫ばなかつたがうまいと言つてくれた。

「一人がそう言つてくれると作つた甲斐があるよ。」

俺はこの時間が何より好きだ。

「アーネスト君、おめでった。」

そうして食べ終わつたら二人は帰る。

「じゃあまた明日。」

「おひーまた明日。」

「うむ、また明日。」

ちなみに今のは上から俺、コウ、ユズの順番だ。そうして1日が過ぎて行つた。今の俺はまだ知らなかつた、一番好きなこの日常が簡単に崩れることを。

## こつもの俺達の日常・1 階での幼馴染みの会話

ドタドタと階段を上がってくる音がする。誰が上がって来たのかは予想ができる。

バーン！！

凄い音がしてドアが開きユズが顔を強張らせて入ってくる。

「ユズもつと静かに入つてこれないの？」

「う～これも全て「コウのせいだ！」

「俺が何をした！？」

何もしていないのに怒られた、理不尽だ。

「つぬさい、ホモ！」

「俺はホモじゃない！ノーマルだ！それに俺はユウが好きなだけだ。」

はつきり言つて俺はユウが好きだ、こらそこ引くな。その理由はユウは女の子の顔をしているからだ、俗に言う男の娘というやつだ、しかも家事が得意で声も高く言葉使い以外は完璧に女の子だ。性格も人懐っこく優しいので本人は気付いて無いが男女両方にモテて、下駄箱のラブレター等は俺とユズが処分している。

「あれに惚れるなと言つのが無理な話だろ？」

「う、まあそなんだけど、でもコウは渡さない！」

「言つてみ、まあいい下で何があつたか教える。」

俺はユズから下であつた事を聞いて氣分が落ち込んだ。ユズと俺が付き合つてゐる…? やめてくれマジで、どうもつ勘違いしてんだあいつ?

「君にそんな顔をされるとものすゞく腹が立つんだけビ。」

「仕方ないだろ、嫌なものは嫌なんだから。」

ユズがこつちを睨んできたが無視だ。

「「」はん出来たよ!」

ユウのこの声でユズの顔が緩み、機嫌になる。

「やつたー!」はんだ!」

ユズと俺はユウの作ったのはんが大好きだ。ユウの料理はプロ並みにうまい。もうお嫁さんにしたい位だ、そんなことを考えていると何を感じ取つたかこちらを睨んできた、エスパーですか?

冒頭から柚姫サイド

私はドタドタと階段を上がる、思い出すだけで腹が立つ、なぜ私がユウの彼女なのだ…? それにユウは鈍感でこつちの気持ちにまったく気付いていない。

バーン!!

私は思い切りドアを開ける、部屋の中にはコウがいた。

「もつと静かに入つてこれないの？」

平然とした顔で文句を言つてくる。何か「コウの顔を見たり立つて腹が立つてきた。」

「う～これも全てコウのせいだ！」

「俺が何をした！？」

「ハメル、ホモ！」

「俺はホモじゃない！ノーマルだ！それに俺はコウが好きなんだ。」

それをホモと叫ぶのがわからないのだろうか？

「あれに惚れるなど叫ぶのが無理な話だり？」

「う、まあそんなどナビ、でもコウは渡さないよ！」

「コウは私のだ！」

「言つてみ、まあいい下で何があつたか教える。」

私が下であつた事を話すと「コウの顔がものすく嫌そつた顔になつた。

「君にそんな顔をされるとものすく腹が立つんだけど。」

「仕方ないだろ、嫌なものは嫌なんだから。」

殴つていいかなこいつ?

私はコウを思い切り睨む。

「「はん出来たよ!」

何分か経つと下からコウの声が聞こえてきた。なんだかさつきのことがどうでもよくなつてきた。

「やつたー!」はんだ!」

私はコウの作った「はんが大好きだ。だから何よりコウの作った「はんを優先させる。階段を降りての途中コウから不穏な気配がしたので、睨んでおいた。

「好きです、付き合ってくださいー！」

皆さんこんにちは、なぜこんなことになつてゐるか今の状況を説明しましよう。今は学校が終わつた放課後、コウと一緒に校門でコズの部活が終わるのを待つてゐました。さて皆さんもうお分かりでしょうか？学校と放課後とイケメンと言えば告白です！好きな人にLOVE YOHOと言うあの告白ですーあ、もちろんコウにですよ。普通顔の俺に告白なんてあるわけ無いぢやないですか、はははは…はあ。

「『』めん、君とは付き合えない。」

「ど、どひじてですか！？」

名も知らぬ女子生徒は涙目でコウに理由を尋ねる。なんかよくありそうな展開だな、対するコウは「それは…。」と言い詰まつてゐる。受ければ良いのと思つてこるとコウが『』ちをチラッと見た、何だろう…

「俺には好きな人がいるから無理です。」

ん？またよ、知り合いがこのセリフを聞けば普通だつたらコズが思い浮かぶ、だが告白をしたと言つことはコウとコズの関係を知らない、しかもコウは理由を言つ前にこちらを見た、と言つことは女子生徒は、コウの好きな人＝俺、になるのでは…？しかもフラれた女子は思い込みとハツ当たりが激しい、完璧誤解されてるぢゃん。

「そうですか、わかりました。」

そう言って女子生徒はこっちを殺意と嫉妬が混ざった目で睨み走り去つて行つた。待つてくれ名も知らぬ女子生徒よ、誤解だ！こいつの好きな人は俺じゃあない！

「どうしたんだ？そんな人生終わったような顔して。」

「どうしたんだ？じゃあない！完璧誤解されただろ！」「

「誤解？なんの？」

「お前の好きな人が俺だつて勘違いされたんだよ。」

「俺は別に構わないけど。」

「構えよ！お前の好きな奴はユズだろ！」「

「は？なんで俺がユズのこと好きにならなきやならないんだ？」

「いいよ別に誤魔化さなくて。」

「待たせたな…って何しているんだ？」

「どうやら口論している間にユズが来たようだ。」

「やあユズ、遅かったね何があったの？」

「ん、まあちよつとな。」

「また告白されたみたいだね。」

「当たりだ。」

「で、受けたの？断つたの？」

「もちろん断つたよ、私にはコウがいるからな。」

ちょっと頬を赤らめてコズが答える、コウの名前を言つのが恥ずかしいからって俺の名前を言わなくてもいいのに。だが問題はそこじゃない。

「まさかと思つたその事を相手に言つたの？」

「ああ、言つたぞ。」

「男、女どっち？」

「両方だ。」

ああ終わった、俺の学校生活終わったよ。といつつ何故コズは拗ねている？そして何故コウはコズを嘲笑つている？

「もつといいや、帰ろい。」

そして俺達は家に向かつて歩き出す。なこやかにコウとコズが後ろの方で口論していたが何だろうか？

「うわー。」

「あやつー！」

しばらく歩いていると後ろの方から悲鳴が聞こえてきた。何だろ？と振り向くとコウとコズが光る魔方陣の上で立っていた。

「なにしているの？」

「足が、動かないんだよ。」

「ユウ、助けてくれないかい。」

「これはもしや小説で読んだ異世界トリップ！？と言つことはこの一人はどこかの世界の勇者に選ばれたことになる。そしてこれは小説でよくある巻き込まれフラグだ、だが俺はフラグに打ち勝つ。

「すまん、今日はスーパーの特売日だった、だから無理。」

「お前は幼馴染みより特売日を取るのか！？」

「では、さらばだ！」

まああいつらならあつちに行つても生きていけるだろう、主人公補正的なもので。それにイケメンがこの世界から一人消えるしな。そう思つていると突然ガシッと肩を掴まれる。

「逃がさないよユウ。」

後ろを向くとユズが俺の肩を掴んでいた。

「やめろー離してくれユズ！」

「 いひなつたらコウも道連れだよ。 」

必死にもがくがコズの手が外れない、どうゆう力してんだ！？最後の力を振り絞つて思い切り振りほどくとコズの手が外れた。コウ達から薄情者などの罵詈雑言が聞こえるが無視する。そして十秒ほど経つと一人は光に包まれて消えてしまった。天国の父さん母さん、貴方の息子はフラグを乗り越えました。

そう感動していたのもつかの間、突然地面が光だした。おそるおそる下を見ると魔方陣が書かれていた。

「 なんでだーー！」

天国の父さん母さん、やつぱり無理でした。そして目の前が真っ白になつた。

崩れ去る俺達の日々..・物語れた幸の心情 (記書き)

ちょっと落書きなどしたので文がかわっています。

## 崩れ去る俺達の日常…苦虫された幸の心情

「好きです、付き合ってくださいー！」

今は学校が終わった放課後、ユウと一緒に校門でユズの部活が終わるのを待っていたら突然知らない女子生徒に声をかけられて今現在に至る。

「「」めん、君とは付き合えない。」

「ど、どうしてですか！？」

どうしてと聞かれても…ユウが好きだとも言えないしな～」  
はユウがいるし。

「それは…。」

チラッとユウの方を見てみるとユウが頭の上にマークが付きそつな顔をしていた、ヤバい可愛すぎる。俺は顔がニヤケそうなのを我慢しながら女子生徒に返答を返した。

「俺には好きな人がいるから無理です。」

よしーこれなら女子生徒も納得してくれる筈だ。

「そうですか、わかりました。」

そう言って女子生徒はなぜか殺意と嫉妬が混ざった目でユウを睨み走り去つて行つた。あれ?何か間違つたか、俺?そしてなにやら暗

い顔をしているユウがいたので話し掛けたみた。

「どうしたんだ？そんな人生終わったような顔して。」

「どうしたんだ？じゃあない！完璧誤解されただろ？が！」

「誤解？なんの？」

俺なんか誤解されること言つたけ？

「お前の好きな人が俺だつて勘違いされたんだよ。」

そうか、ユウの方をチラッと見たからそれで女子生徒は気付いたのかあの女子生徒なかなか勘がいいな、それとユウそれは誤解じゃあないぞ。

「俺は別に構わないけど。」

さりげなく告白してしまった、まあユウのことだからどうせ……「構えよ！お前の好きな奴はユズだろ！」ほらこのとおり気付かぬかなり鈍感。そして勘違いしている。

「は？なんで俺がユズのこと好きにならなきやならないんだ？」

頼むからやめてくれその勘違い、物凄く嫌だから。

「いいよ別に誤魔化さなくて。」

誤魔化してない！本当にから！

「待たせたな… つて何しているんだ？」

「うつやうら口論している間にユズが来たよつだ。」

「やあユズ、遅かったね何かあったの？」

「ん、まあちよつとな。」

「また告白されたみたいだね。」

「当たりだ。」

「で、受けたの？断つたの？」

「もちろん断つたよ、私にはユウがいるからな。」

「ちょっと頬を赤らめてユズが答える、これでも気付かないのがユウだ。」

「まさかと思うナビ、その事を相手に言ったの？」

「ああ、言つただ。」

「男、女どっち？」

「両方だ。」

ああ終わった、そんな顔をしながらユウは涙目になっていた。ユズはユウに告白にも似た言葉に気付いてもらえず拗ねていたので嘲笑

つてやつた。

「 もひここや、帰ひひ。 」

セツコウが言つて俺達は家に向かつて歩き出す。

「 よくも私のこと嘲笑つてくれたね。 」

ユズがこいつを恨めしそうな目で見ながら話しつけてきた。

「 ああ、かなり愉快だつた。 」

そつ言うと横から鉄拳が飛んできたのでよけ無視をする。横で何か言つてるが無視だ無視。そうやってしばらく歩くと突然地面が光りだして体が動かなくなる。

「 うわー。 」

「 きやー。 」

ユズの叫び声が聞こえたと言つとはユズも同じ状況みたいた。

「 なにしてるの? 」

ユウだけが平然と立つていた。

「 足が、動かないんだよ。 」

「 ユウ、助けてくれないかい。 」

いろいろな知識をもつたユウなら対処法がわかるかも知れない。そ

う思い、コズと一緒にコウに助けを求めるところはなにか考え決心したような顔をして言った。

「すまん、今日はスーパーの特売日だった、だから無理。」

「お前は幼馴染みより特売日を取るのか！？」

「では、さらばだ！」

そう言って逃げようとしたコウの肩をコズがガシッと肩を掴む。

「逃がさないよコウ。」

「やめろー離してくれコズー！」

「いりなつたらコウも道連れだよ。」

コウは必死にもがくがコズの手が外れない、いいぞそのまま掴んでる。だがそれも長くは持たずコズの手がコウの肩から外れた。

「薄情者ー！」

「裏切り者ー！」

コウに罵詈雑言を並べるがコウは耳に手を当てて無視を決め込んでいる、後でお仕置きしてやる。やつ思つていても田の前が真っ白になり意識が途絶えた。

## 「Where?」何処ですか？

気がつくと奇妙な所にいた、周りは空間がぐちゃぐちゃで金んだような感じになつていて、Where? 何処?

「I'mは次元の狭間じゃ。」

「…? 誰だ!」

後ろから声が聞こえ振り向くと奇妙な仮面が浮かんでいて話し掛けてきた。

「ワシは『具現の仮面』、お主には試練を受けてもらひ。」

「ちょっと待つてー何のことだかわからぬ、説明してくれる?」

突然ここに転移して仮面が喋つて試練を受けろつてわけがわからな  
い。

「ふむ、すまん説明がまだだつたな、ここはお主が暮らしていた世界とお主の友達が召喚された世界『エルシティア』の狭間でワシはこの狭間に封印されている具現の仮面と呼ばれている者だ、そしてワシがお主をここへ連れてきた。」

「何で俺をここに連れてきたんだ?」

「ワシはこの狭間に長い間封印されていて退屈でな、この狭間から出たかつたがしかしワシだけではどうしようもなかつた、そんな時

にエルシティアの世界からお主の世界へ大量の魔力が流れて行った、ワシは一か八かでその魔力に自分の魔力を忍ばせそして魔力を伝つて適合者であるお主を見つけたのだ。」

「ん？でも呼ばれたのって「ウとコズなのがどうやって魔力を伝つて俺のことを見つけたんだ？」

「お主の友達が召喚される際に友達と接触しなかつたか？」

俺は記憶をさかのぼつてみる。……あつ！コズに肩を掴まれた時か！コズ、なんてことしてくれたんだ、せつかくフラグを回避したと思ったのに、文字通り道連れにされてしまったようだ。

「思い出したようだのう。」

「ああもうそれはバツチリと、とにかく適合者ってなんだ？」

「適合者とはワシを扱える可能性を秘めた者のことだ。ワシの力は強大だ、それゆえに適合者でない者がワシを使えば欲望に呑まれ自我を無くす者も居れば力に耐えきれず死んでしまう者もいた、しかし適合者はワシを自我を無くすこともなく力を扱えることができる素質を持っている。」

「じゃあ試練は？」

「試練とはお主の力を試すことだ、適合者であつても最低限の力がなければワシの力に呑まれてしまうからのう。」

「俺に拒否権は？」

「無い。」

「やつぱりですかコノヤロー！」

「ちなみに俺は元の世界に帰れるのか？」

「今のワシにはお主を元の世界に帰す力は無い。」

「あ、予想はしてたが仕方ないどうせ帰れないなら試練つてヤツを受けるか。」

「わかった、試練受けるよ。」

「ならばワシを顔に装着しや。」

「一体どんな試練が待っているのかと考えながら俺は仮面を装着すると田の前が真っ白になった。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0637m/>

---

蛇に憧れる男の異世界生活

2011年10月7日02時37分発行